

w i t h

東北大学病院 地域医療連携通信「ウイズ」

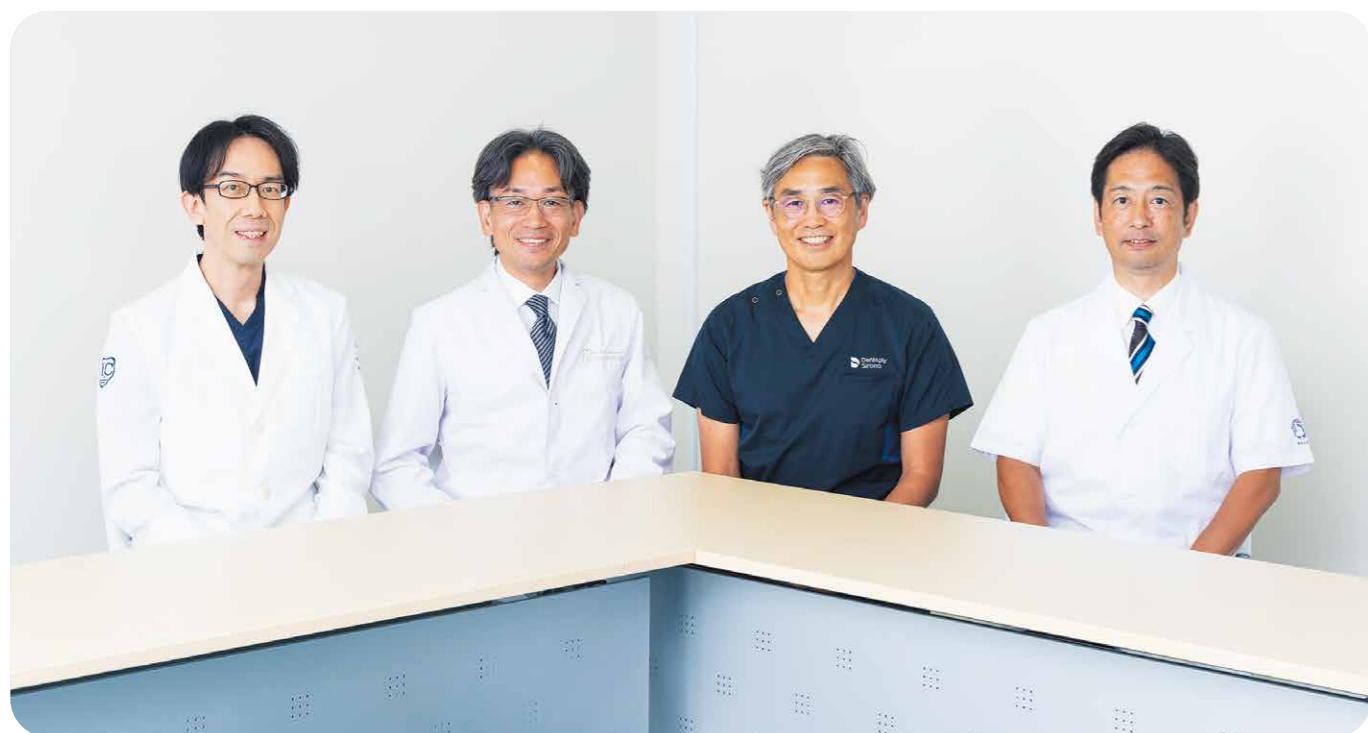


57

座談会「先進的、包括的歯科診療の実現、そして創造的価値の創出へ」

「先端歯科医療センター」開設 先進的、包括的歯科診療の実現、 そして創造的価値の創出へ

東北大学病院は2024年5月、「先端歯科医療センター」を開設しました。外来診療棟の一画、東北大学の象徴である赤れんがを使った入り口の先、洗練された空間に世界標準の医療機器が並び、歯科におけるあらゆる部門の専門家が集います。そこで行われるのは先進的な歯科医療のみならず、未来の医療の担い手となる人材の育成、そして産学連携による新たな価値の創出。センター開設の目的と施設の概要、展望について語ってもらいました。



先端歯科医療センター
副センター長

依田 信裕

2003年東北大学歯学部卒業。東北大学大学院歯学研究科助教、シドニー大学客員研究員、東北大学病院咬合回復科講師を経て、2024年東北大学大学院歯学研究科教授。同年5月より現職。

総括副院長
(歯科診療部門長)

江草 宏

1998年広島大学歯科部卒業。香港大学、米国UCLA、大阪大学を経て、2014年東北大学大学院歯学研究科教授(東北大学病院咬合修復科科長)、2018年東北大学病院副院長、2022年より総括副院長(歯科診療部門長)。

先端歯科医療センター
センター長

齋藤 正寛

1989年神奈川歯科大学卒業。ワシントン州立大学研究員、大阪大学大学院、東京理科大学などを経て、2013年より東北大学歯学研究科歯科保存学分野教授、2022年より東北大学病院副院長就任。2024年5月より現職兼任。

先端歯科医療センター
副センター長

北浦 英樹

1991年長崎大学歯学部を卒業。長崎大学助教、米国Washington University in St. Louisポスドク研究員として勤務。東北大学大学院講師を経て、2013年顎口腔矯正学分野准教授。2024年5月より現職。

新しい価値観を生み出し 成長を描けるような 世界標準の診療所を

—まずは先端歯科医療センター設立の経緯をお聞かせください。

江草：東北大学病院の建物内に歯科診療部門が開設されたのが2010年で、以来基本的には同じ設備で診療をしてきました。そろそろ変えなければいけないというタイミングでもあり、国際卓越研究大学の話も挙がっていたので、単に設備を新しくするのではなく、新しい価値観を生み出し、成長を描けるような施設を作ろうと考えたのがきっかけでした。病院は基本的に医療者と患者さんの関係で成り立っていますが、東北大学病院は特定機能病院ですので、新たな医療技術の開発や高度医療人材の養成もミッションです。そのために、産業界、行政や、国内外トップクラスの歯科医療機関など、広いステークホルダーとも関わり合いながら新しいものを創出する場所になる。それが最初のコンセプトです。形になるまでにはいろいろな困難が伴いました。特にコロナ禍の真ただ中で、どうしても新しいことに積極的には踏み出せないような空気感の中、まずは将来を創っていこうという雰囲気づくりから構成員の皆さんと頑張っ、何とか完成にこぎ着けました。

—施設の特徴と、どのような治療ができるのかを教えてください。

齋藤：施設としては「世界標準の診療所」を作るのが目標でした。この10年間で歯科医療の技術革新があり、先進医療を行うためにはそれに合わせた設備投資が必要でした。本センターには、外科処置室を中心に、そうした先端の機器をそろえています。そこで行う医療として具体的に分かりや

すいのは、顕微鏡を用いた治療です。歯の根っこや歯周病、差し歯の治療などの際に、顕微鏡で拡大して見て、より正確に、精密に治療できるようになります。

江草：その顕微鏡については、世界標準を超えて世界最高水準と言ってもいいかもしれません。

齋藤：確かにそうですね。もう一つの特徴はデジタル医療で、こちらは先端歯科医療センターで実際に治療が行われている依田先生にご説明いただきましょう。

依田：はい。オーラルスキャナーという口腔内を高精度で3Dスキャンできる機械を使っています。従来の歯の型取りとは違って、患者さんに負担をかけずに、より精密な型取りがデジタルで可能になります。これまでも東北大学病院にはありましたが、これをメインで使っていくことになりました。

江草：これまでは頻繁に使うものではありませんでしたが、先端歯科医療センターではそれが標準になります。デジタルデータなので、世界中どこにでも飛ばして、被せ物などを作ってもらうこともできます。そのデータを基に研究も可能ですし、応用方法が広がっていきますよね。

齋藤：外科処置室での診療の様子を遠隔で見られる部屋を設けているのも先端歯科医療センターの特徴ですが、オーラルスキャナーの3D画像や、先ほど話した顕微鏡の画像についても、リアルタイムに見られるようにしています。若い歯科医師や地域の歯科医師がそこで手術の様子を見て学び、ディスカッションできる環境を整えています。もう一つ先端歯科医療が再生医療です。患者さんご自身の血液を移植することで傷が早く治るという、これまでの再生医療を継続することに加え、幹細胞を用いて骨を再生する医療を今年始める予定です。

専門家が集結することで 可能性を見だし 高度な治療を迅速に

—実際に先端歯科医療センターを利用される患者さんの反応はいかがでしょう。

依田：先生方が話されたように先端の機器や設備がそろっていることに加え、一般診療室は従来よりもゆとりのあるスペースを確保していることから、ゆったり快適に過ごせると、大変評判が良いです。患者さんからは開放感があると言われますし、アシストの人も余裕を持って動いて、ドクターも快適に治療ができています。目の前に大きなモニターがあるので患者さんへの説明も格段にしやすくなりましたね。

北浦：私も矯正歯科医が治療に入る機会はこれからですが、先端歯科医療センターの一番のメリットは専門家が集まる場ができたことだと感じています。他の専門の方と対話することで新しい可能性が見えてきたり、最善の治療ができるようになったりする場なのかなと思います。例えば補綴の診療で歯がない所に入れ歯やインプラントを入れる際、隙間を作ってほしいという場面があります。あるいは保存科で虫歯の根っこの治療をしようにも、歯茎がかぶさってできないケースもあります。そんな時、従来は科が離れていてすぐには相談できませんでした。それが先端歯科医療センターという同じ場所にいることでコミュニケーションが容易に取れるようになって、ちょっと難しいなと思っていた治療が可能になります。あるいは、さらに高度な治療も、リアルタイムで話すことで迅速に提供できる場になると思います。私もそうしたことに貢献していきたいと考えています。

医療、研究、産業が 先端歯科医療センターに 集約され、連動する

依田：北浦先生のおっしゃるように、各診療科の専門医レベルの先生方が協働して治療が行える環境だと、まさに実感しています。歯科の横のつながりで、より難しい症例に対して知識を出し合って治療できることは、患者さんにとって非常に大きなメリットだと思います。地域の先生方も、どうしていいかわからない症例について、高度な専門医が集まる先端歯科医療センターに紹介いただく、という道筋ができることにも期待しています。その準備段階として、大学内でも分野を横断するような形で勉強会を行っており、今後大きくしていきたいと考えています。

江草：先生方のおかげで、歯科における全ての専門家が患者さんの周りに集まってくるという包括的歯科診療が可能となりました。単に包括的ではなく、11ある専門科のプロが集まって患者さんの口の中を一つの単位として全体的に診て、最善を尽くすことを目指します。また、東北大学病院は臨床研究中核病院ですので、歯科にとっても臨床研究を行う場所です。近年、患者さんの全身的健康状態と口の中の状態の関係が注目されていますので、医科と連携して先端歯科医療センターを使った臨床研究も行われるでしょう。医科歯科連携がよりスムーズに行える場所にもなっています。そして臨床研究のデータが出て、企業の方がそのデータを基に何かを開発したいとなれば産学連携が生まれますので、アカデミックサイエンスユニット(ASU)[※]で対応する。そんなふうに医療、研究、産業が集約され、それらが連動していく。そんな全体像をイメージしています。

—お話に出たASUの動きについても教えてください。

齋藤：これまでもASUは本院の臨床研究推進センターにあり、そこから歯科に興味のある会社さまには歯科部門に来てもらっていました。この度、歯科がリードしてASUを行うのは初めてで、企業の方も医科に比べて歯科の現場に来る機会がありませんので、内覧会には多くの方が興味を持って来ていただきました。企画の方、マーケティングの方、研究の方、管理部門の方と、いろいろな立場の方が参加された、ブレインストーミングでは、マーケティングの方であればどういうビジネス展開があるのかディスカッションしたいという様子でした。皆さま有益に使いたいと考えていただいているようです。

江草：医科歯科連携が進んでいると言っても、やっぱり医科と歯科では業界や市場の規模が圧倒的に違います。ですから歯科系の企業さんも全体のASUを使いたくても大き過ぎて使い勝手があまり良くなかったところに、ニーズがマッチしやすいサイズ感の、いわば歯科版ASUを提供した形になります。全体のASUに、歯科に入りやすい入り口ができたという感じでしょうか。

齋藤：これからの課題はリピーターになってもらうことで、そのためにはよりよいプログラムを用意しなければなりません。企業の方に来ていただいたときに、皆さんからどういう要望があるか、どんなことを求めているか、そのフィードバックに対応するスタッフを配置して、きめ細やかな配慮をしようと考えています。ASUを利用いただいた企業さまのロゴをセンター内に張り出して、こういう企業と一緒に共同研究を行っていますという情報発信も行っていきます。

※ASU 東北大学病院で臨床研究推進センターバイオデザイン部門が窓口となって推進しているプログラム。企業の方が直接医療現場に入り、現場観察を通して多くのニーズを探索し絞り込みを行い、新たな医療機器や医薬品・システム・サービスなどの製品化・事業化を目指す。

先端医療を多くの人に届け 幅の広い医療人材を輩出し さまざまな立場の人と共創を

—最後に、先端歯科医療センターが今後どのような発展を遂げていくのか、ビジョンをお聞かせください。

齋藤：まずは先端医療を多くの人に受けていただきたいというのが一番です。そしてASUで企業の方と共同研究を行っていくこと。もう一つの目標が、先端医療を志す若手の歯科医師を増やすことです。

江草：若者にとっては、目の前に世界レベルの先端医療があることは大きな刺激になると思います。それだけでなく、先ほどの話にも出たように、ここでは臨床研究も産学連携も医科歯科連携も行われますので、歯科医だけを真つすぐ目指していた学生にとって、今までになかった視点が得られるかもしれません。東北大学の歯学部や大学院では「社会が抱える課題を多方面から解決できるマルチモーダルな専門知識を備えた人材育成」を掲げていますが、それに寄与する場になっていくと思います。先端の技術に触れたいと入ってきて、刺激を受けやがいをもち医療に携わる中で、知らなかった面白いものが回りにたくさんある。それで他のことにも興味を持って、専門職としてより幅を広げ成長した人材が輩出されていく。そんな場所になれば理想的です。それは学生や若手に限ったことではなく、実はわれわれにとっても、そしてさまざまなステークホルダーの方にとってもそうです。いろいろな立場の人が関わることで新たな価値観を創出していく「コ・クリエーション(共創)」を実現する場所になってほしい。これこそがまさに、国際卓越研究大学に求められている創造的価値ではないかと考えます。

設備紹介

先端歯科 医療センター

先進的な治療やより低侵襲で安全な治療など、患者さんの多様なニーズに応える高度で専門的な歯科治療を提供する東北初の大学病院施設「先端歯科治療センター」の設備をご紹介します。



統一性のある洗練されたデザイン 治療室

東北大学病院の前身である、県立宮城病院の正面玄関と同色のれんがを用いて落ち着いた空間を演出しています。広くゆとりとした空間を確保するとともに高機能の歯科ユニットや酸素・吸引なども完備し、多様なニーズに対応できます。



高度な人材育成の場へ モニタールーム

手術室では不可能であった大人数の見学や術中の議論を可能とするためモニタールームを完備しています。マイクロ手術室の顕微鏡と連動しており、術者と同じ視野で見学することが可能です。高度な人材を育成することにより社会還元を目指します。



少ない負担で型取りを可能に 口腔内スキャン

口腔内スキャナは、小型カメラで口腔内状態を撮影し立体デジタル画像を生成する装置です。矯正治療やむし歯治療、インプラント治療などに用いられ、従来の型取りに比較して患者さんの負担や不快感を大幅に軽減します。



手術用顕微鏡を備えた広々とした空間で高度な治療を提供 外科処置室

センター内の2つの外科処置室に専用の手術用顕微鏡やレーザー医療機器を配備し、歯を保存するための手術を提供しています。今後は、現行の手術に加え、先進医療や臨床研究、医師主導治療も実施できる施設へと発展させていきます。

助産師が主体となり継続的なケアを提供する院内助産を開始

東北大学病院産科では、2024年8月より、妊娠経過や既往歴に問題ないと医師が判断した妊産婦を対象とした院内助産を開始しました。

院内助産では妊産婦とご家族の意向を尊重しながら、快適で満足の得られる妊娠・出産・育児が行えるよう、妊娠から産後まで、助産師が主体となり継続的なケアを提供します。

妊娠中は、助産師外来として妊娠26週以降の妊婦健診を医師と交互に実施し、妊娠中の過ごし方や体作りを提案します。また出産に向けてパースプランを作成し、妊産婦の意思や主体性を尊重した出産が実現できるよう対応します。出産後は一般的な育児や授乳支援に加え、退院後の生活を見据えた個別的な支援を行います。いずれも妊娠前から関わっている専任チームの助産師が対応するので安心感があります。

一方で、妊娠・出産が正常に経過していても、急に異常を来す場合もあります。そのため助産師は医師と連携を

取り、必要時にはすぐに医師の診察を受け適切な医療を受けられるよう体制を整えています。

多くのハイリスク妊産婦を受け入れている当院の実績と経験を基に、熟練した助産師が対応します。メンタル不調や社会的ハイリスク妊産婦など、気がかりな妊産婦を当院へご紹介ください。「満足できるお産」と「より良い養育環境調整」、「安心して育児ができるスタートライン」のお手伝いができるよう、最大限支援させていただきます。



医療AIセンター(AI Lab)を設置しました

医療AIセンター(センター長:田宮元教授)を2024年8月1日に設置しました。呼称は前身の組織から引き継ぎ、今後も東北大学病院 AI Labとなります。

医療AIセンターは、世界的に急速に進んでいる人工知能の医療応用に、柔軟かつ安全に対応していくために設立されました。人工知能は、これまで高度に訓練された人間にしかできなかったような技術(いわゆる匠の技)の模倣や、膨大な知識の活用、人間には不可能な発見まで行うことのできるレベルに達しており、医療分野への応用が進んでいます。例えば、膨大な電子カルテの情報を人工知能が読み込んで解釈することで、精密化された有効な治療法のアイデアが得られたり、もっと身近な医療の効率化・スマート化が実現されたりといったことが期待されています。このような社会からの要請に応えるべく、AI Labでは、AIに習熟した医療人材を育成すること、院内のリソースを活用したAIによる医療機器開発・創薬の受け皿となること、さ

らには様々な医療AIソリューションを通して院内の医療DXに貢献することを目指しています。医療AIセンターでは、院内の各センターや診療科と連携しながら、急速に発展する人工知能技術の恩恵が皆さまへ還元されるよう、努めてまいります。

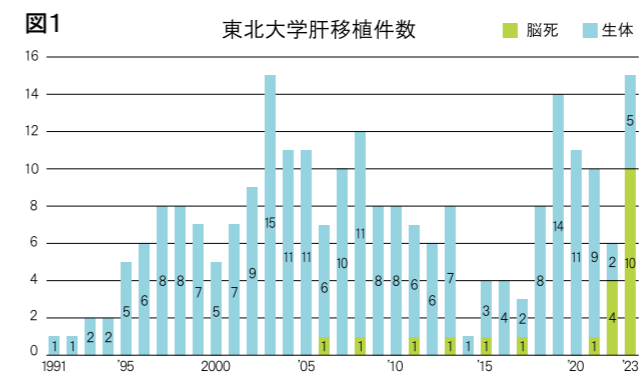


2024年8月から肝移植の新規紹介枠を拡大し、受け入れ体制を強化

末期肝不全に対する最も効果的な治療法の一つとして、1963年に世界で初めて行われた肝移植は、これまでに世界で10万人を超える患者さんに実施されています。日本では、1990年に初めて生体肝移植が行われ、その後、2022年までに肝移植を受けた患者さんの数は11,000人以上となっています。また、1999年に始まった脳死肝移植も徐々に増加しており、2023年度末までに880例が実施されています。

東北大学では、1991年7月に移植再建内視鏡外科(旧第二外科)のスタッフが東日本初の生体肝移植を成功させ、1999年には臓器移植法施行後、本邦初の脳死肝移植も成功させています。2024年7月までに、生体肝移植223件、脳死肝移植23件、合計246件の肝移植を実施しており、東北地方で最も多い移植数を誇っています。

近年、肝移植を取り巻く環境が変わりつつあります。2023年は、当院で10例の脳死肝移植が行われ、全国で5位となりました(図1)。本邦でも初めて100例を超えたことを受け、脳死肝移植の登録基準が変更されました。それまではChild-Pughスコア10点以上で初めて登録可能でしたが、2024年1月からは7点で登録が可能となりました。登録後は、MELDスコアに基づいて順位がつけられます。また、肝細胞癌、原発性硬化性胆管炎、胆道閉鎖症(繰り返す胆管炎・消化管出血)、肝肺症候群、肺高血圧症などの患者さんには経時的な加点が行われます。現在、脳死登録から実際に移植が行われるまでの待機期間は1年3か月です。MELDスコアが高くない場合でも、条件次第で脳死肝移植の機会が得られるため、早めの登録が重要です。



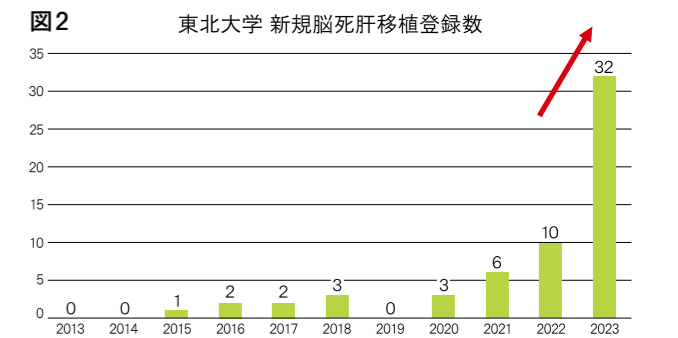
生体肝移植の適応は、脳死肝移植と大きく変わりません。ドナー手術に関しては、5年ほど前から低侵襲化を図っています。以前は横切開によって腹直筋を離断していましたが、現在はほとんど正中切開のみで手術が行われています。また、術後1週間から10日程度で退院可能となり、術後1か月の外来受診後は職場復帰が可能となることが多くあります。我々は、Donor safetyを第一に考えてい

ます。幸いにも、東北大学のドナー手術における周術期死亡率は現在まで0%であり、今後もさらに負担の少ない手術を提供していきたいと考えています。

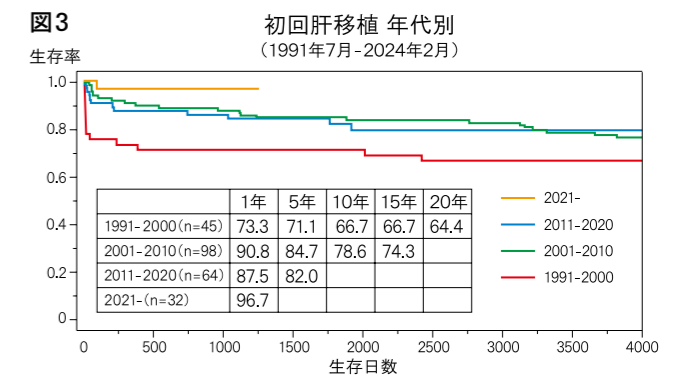
最近、特にアルコール性肝硬変の紹介が増えています。生体肝移植には6か月、脳死肝移植には18か月の断酒期間が必要です。移植前からアルコール依存症治療の専門外来または精神科への通院が義務づけられていますので、早めの受診と通院をお願いいたします。

また、東北大学は局所進行の切除不能肝門部胆管癌(TxNOMO)および切除不能大腸癌肝転移に対する生体肝移植の先進医療B実施承認施設となっています。対象年齢は70歳未満です。該当する患者さんがいらっしゃれば、ぜひご紹介いただければと思います。

2023年度は、関連病院の先生方のご尽力もあり、30人以上の新規脳死登録が行われました(図2)。



現在、総合外科移植肝臓グループのスタッフは8人、平均年齢39.5歳と全国的に非常に若いチームで構成されています。また移植成績も年々上昇しております(図3)。今後も、より多くの患者さんを救命すべく、消化器内科(肝臓グループ)の先生と相談し、2024年8月から新規紹介枠を増加して対応しています。末期肝不全の患者さんをなるべく早く移植医療につなげられるように、待ち時間を極力減らし、情報提供を迅速に行いたいと考えています。お困りの患者さんがいらっしゃれば、適応も含めてお気軽にお問い合わせください。



Report

ナース・オブ・ザ・イヤー NURSE OF THE YEAR 2024

ナース・オブ・ザ・イヤーとは、2001年度に病院長より病院変革アイデアの募集があり、その中で承認され、始まった表彰制度です。診療・看護に貢献した職員の貢献度を形に表わし、意欲向上を醸成することを目的とし、その年度の活躍が認められた看護職員が選出されます。



2023年度 ナース・オブ・ザ・イヤー 表彰式を開催しました。

2024年5月10日、2023年度 ナース・オブ・ザ・イヤー授賞式を執り行いました。

表彰式では、張替 秀郎病院長から受賞者に表彰状が手渡され、「当院の診療において看護師の皆さんが多岐にわたる多様な役割を担っていることを、今回の表彰であらためて認識した。これからも病院の核となって業務に取り組んでほしい」と日頃の活躍へのねぎらいとともに祝辞を送りました。



受賞者より一言ご挨拶



西16階病棟
菅原 寛子

患者安全活動として、呼吸数測定
の啓発を進めました。呼吸状態の
変化から急変兆候を捉えて、早期
にMETコールに繋がる事例が見
られました。この賞を励みに引き
続き精進してまいります。



西12階病棟
中村 香菜江

点眼表システムの作成および運
用に関われたことを嬉しく思いま
す。今後も、患者さんの治療継続
に役立つシステムを目指して改良
を重ねていくとともに、患者さん
に寄り添った看護の実践に努め
てまいります。



東16階病棟
渡邊 香織

この受賞は、新人育成のための新
たな取り組みについて協力し支え
てくださった東16階のスタッフ
のおかげだと思っております。今
後も、看護の質を高めていけるよ
う人材育成に尽力してまいります。



東11階病棟
菅野 直子

ケアプロセスの一元化プロジェ
クトチームのスタッフの指導の下、
手術申し送りIT普及に向け微
力ですが貢献できたことに感謝と
喜びを感じています。今後も、働き
やすい環境づくりに取り組んでい
きたいと思っております。



東8階病棟
今井 亜希子

処方指示カレンダーの導入に携わ
らせていただいたことで、新たなこ
とを多職種で連携して進めるとい
う経験ができました。今後も看護
部情報・リサーチでの経験を活か
し、病院に貢献していきたいと思
います。



西6階病棟
大場 美友紀

NICU・GCUに入院する赤ちゃん
は入院早期から退院後まで継続
した退院支援が重要となってきま
す。今回はその取り組みを評価し
いただき、今後も赤ちゃんご家
族が安心して育児ができるよう支
援していきたいと思っております。



東15階病棟
三浦 温子

先端治療ユニットの開設では、
複数の診療科が使用する短期入
院病棟になるため、統一した看護
ケアや記録の提供を目的に、看
護パスを作成し運用することがで
きました。今後も貢献できるよ
う精進してまいります。



高度救命救急センター
荒谷 遥香

救急看護に必要な知識である
ICLS・JPTECコースの指導者
として、講習会を定期開催し、多く
の方に受講いただいたことが評価
され、大変嬉しく思います。今
後も継続し、スタッフの育成、
看護の質向上に尽力していきま
す。



高度救命救急センター
松崎 奈津美

救急外来のハイブリッドERの開
設前から多職種・多部門での話し
合いや準備を進め、毎月多職種
共同のシミュレーション教育を開
催するまで至りました。今後も患
者さん第一の看護を実践してい
きたいと思っております。



ICU・HCU
佐伯 緒里恵

コロナ禍でも学びの機会・質を維
持するために、看護部教育担当
として、オンラインツールの活用や、
トピックス毎に学べるよう講義動
画の作成に取り組みました。看護
部教育に関わる皆さまのご理解
とご協力のおかげです。



「紹介患者オンライン予約システム」の運用を開始しました

今年4月から試行運用を経て、紹介患者オンライン予約システムの運用を開始いたしました。地域医療連携協議会の約4割の医療機関が、利用手続きを完了されております。夜間、土日も新患予約を申し込みすることができ、当院からの予約票の返信待ちの時間がなく、大変好評をいただいております。貴院のスタッフの方々や、患者さんの負担軽減のため、ぜひご利用いただけますと幸いです。今年10月には地域医療連携協議会の歯科部門の発足を予定しており、歯科医療機関を対象としたオンライン予約システムの運用も開始いたします。多くの医療機関がスムーズにご利用をいただけるよう体制を整備してまいります。

〈利用方法〉

1. 東北大学病院ホームページの専用入り口から、ID・パスワードにてログイン後、その場で予約申し込みが可能となります。
2. 予約を確定後、予約票・送付書が印刷されます。予約票はその場で患者さんへお渡しいただき、送付書は紹介状と一緒に、当院の地域医療連携センターへFAXすることで予約が完了します。



ログイン画面イメージ

※ 予約取得後の患者さんへの問い合わせは、当院の地域医療連携センターから直接患者さんへ連絡いたします。

〈必要なもの〉

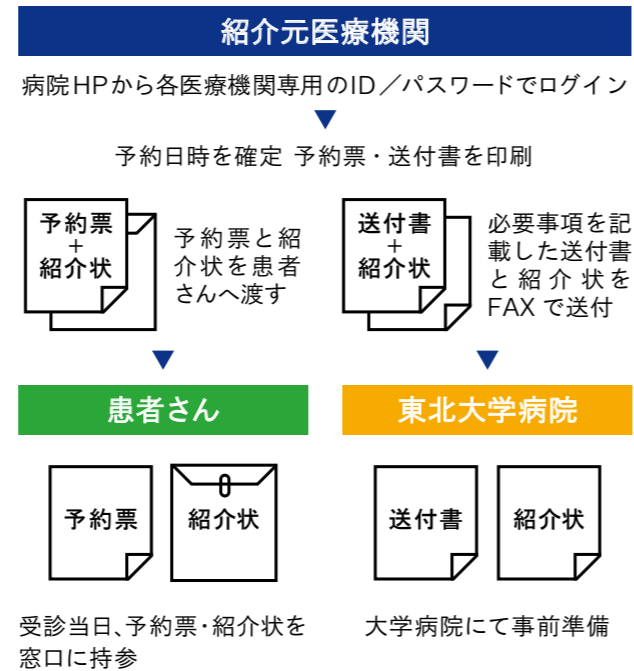
- インターネット回線が接続されたパソコン、タブレット端末
- 予約票を印刷する接続プリンタ

〈利用可能日時〉

24時間ご利用可能です。

※ただし、受診希望日の2日前（土日祝日、12/29～1/3を除く）からの予約は直接、地域医療連携センターへFAXまたは電話にてお申し込みください。

〈利用フロー〉



もっと知りたい! 紹介患者オンライン予約システム

Q オンライン予約システムの利用手続きはどうしたらよいですか。

A ご利用には東北大学病院地域医療連携協議会の加入手続きが必要となります。加入をご希望される施設さまは地域医療連携センターまでお問い合わせください。

Q インターネット端末でオンライン予約システムを利用するため、セキュリティ対策は実施されていますか。

A 厚生労働省「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」に基づき、ご利用いただくPCには、事前にクライアント証明書のインストールが必須となります。証明書をインストールしたPCのみで、予約システムを利用することが出来ます。当院から指定した医療機関毎のクライアント証明書のインストール後、安心してご利用ください。

理念を改訂しました



2024年5月、東北大学病院の理念を改訂しました。新たな理念である「先進の医療を優しさとともに」は、患者さんに寄り添い、最善の治療を提供すること、高度な技術を駆使し、難治性疾患や希少疾患を含めたあらゆる疾患に立ち向かうこと、そして、すべての人の健康的な生活のために、未来に続く持続可能な医療の実現に向けて努力することを意味します。この新たな理念のもと、当院教職員は一丸となって、患者さん一人ひとりにより良い医療を提供し、病院のさらなる成長と発展を目指してまいります。

MMWINでのカルテ共有を開始しました



2024年7月より東北大学病院の医師のカルテ記載（プログレスノート）、看護サマリ、退院サマリ、紹介状がMMWIN（みやぎ医療福祉情報ネットワーク）で公開・共有が始まり、同意いただいた患者さんの臨床情報が閲覧できるようになりました。病院間での診療内容や説明内容が把握できるようになることで、紹介時の作業が効率化されるとともに、一貫性がある安全・安心な医療の提供につながることが期待されます。今後、現在共有できていないレポートなどへも拡充も進めてまいります。

「まちかど健康ラボ」がオープンしました



「東北大学病院健診サテライトまちかど健康ラボ イオン富谷店」を2024年7月18日に開設しました。まちかど健康ラボは目と全身の健康状態をセルフチェックできる施設で、同意を得た方には疾患の早期発見等を目的とした研究に協力いただきます。視力、実用視力、視野等の眼科検査に加え、皮膚、睡眠、自律神経と血流等の検査など、目と全身の健康状態を本格的・包括にチェックし、研究参加に同意いただいた方のうち、希望者を対象に当院の医師が週1回、予約制で健康相談および生活習慣アドバイスを実施します。

第24回からだの教室を開催しました



2024年8月31日、第24回からだの教室「東北大学病院 バックヤードツアー～のぞいてみよう医療の現場2024～」を開催しました。抽選で選ばれた小中高生30名と一緒に、普段は見ることのできない大学病院の裏側を見学しながら、さまざまな医療現場を体験していただきました。参加者の皆さまからは「普段は見れないところを見れて楽しかった」、「スタッフの説明が分かりやすく、実際に使ってみることができて感動した」、「自分も人の役に立つ仕事をしたかった」といった声が多く寄せられました。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。

ひとつと健康サミット

みなさんの息抜き方法やストレス解消方法を聞きました



総括副院長
(歯科診療部門長)
江草 宏

最近、中学生の息子がマイケルジャクソンを大好きになり、一緒に聴きながらマニアックな話で盛り上がることで、リフレッシュしている自分に気が付きました。



先端歯科医療センター
副センター長
依田 信裕

美味しいコーヒーを飲むことです。隔週で七ヶ宿町の診療所に出張しますが、早朝の七ヶ宿公園の自然の中で飲むコーヒーは格別です。



先端歯科医療センター
センター長
齋藤 正寛

毎日1時間の通勤ランと週末に山を走るトレイルランニングを楽しんでいます。また世界の100マイルレースに出走・完走に挑戦しています。



先端歯科医療センター
副センター長
北浦 英樹

ロードバイクで行動範囲を広げて、山や海にサイクリングを楽しんで健康づくりをしています。



<表紙のはなし>

今号の表紙は外来C棟5階にある先端歯科医療センターで撮影を行いました。特集座談会に登場した4名に加え、当センターの鎌野優弥 医局長と渡部千代 歯科衛生士長、日頃から口腔ケアを担当している佐藤由美子 歯科衛生士も参加。院内でも特に洗練されたこの場所で、患者さんを迎えるスタッフの素敵な笑顔が輝く一枚に仕上がっています。

ウェブマガジン、メールマガジン始めました！

東北大学病院ウェブマガジン「iINDEX」では、当院独自の取り組みや医療に携わる人物のインタビュー、簡単にできるエクササイズなどのコラムやお役立ち情報を定期的にお届けしています。さらにメールマガジンも開始しました。ぜひ、ご活用ください。配信をご希望の方は下記よりご登録(無料)いただけます。



〈ウェブマガジン〉

iINDEX



〈メールマガジン〉

月1回配信〈不定期〉

<https://www.hosp.tohoku.ac.jp/webmagazine/>



東北大学病院

みんなの未来基金

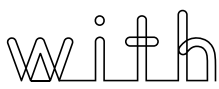
新しい治療法や医療機器を開発し、未来型医療をリードすることで、明るい未来をつくりたいと考え、「東北大学病院みんなの未来基金」を創設しました。皆さまからの温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

<https://www.hosp.tohoku.ac.jp/kikin/>



編集後記

今号の特集は、先端歯科医療センター。東北に初となる先端医療施設が開設したということでこれからの期待が高まります。特集では先生方から当センター開設とこれからのに向けた熱い思いを知ることができ、口腔ケアと健康との強い結びつきを改めて感じました。酷暑を乗り越えて、やっと過ごしやすい気候となってきました。口腔ケアに気をつけつつ、食欲の秋を楽しみたいと思います。皆さまもそれぞれの秋を楽しめますように。(広報室 信夫)



第57号 2024年10月発行

東北大学病院 地域医療連携通信「ウィズ」編集・発行：
東北大学病院広報室／デザイン：akaoni／撮影：志鎌康平
／◎東北大学病院／本誌に掲載されている内容の無断
転載、転用及び複製等の行為はご遠慮ください。

お問い合わせ 東北大学病院 広報室
TEL: 022-717-7149
Eメール: pr@hosp.tohoku.ac.jp
URL: www.hosp.tohoku.ac.jp

